

国際開発プランニングコンテスト2014

活動報告書



2014

はじめに

—代表挨拶

「人の苦しみはそれを見た者に義務を負わせる」

これはフランスの哲学者ポール・リクールという言葉です。世界では未だ多くの人が貧困という状況に苦しんでいます。このような状況を少しでも解決するための一役として働きたい、と思う方は多いのではないのでしょうか。

2015年までに世界の貧困を半減させ、最も貧しい人々の生活を向上させるための意欲的な行動計画「ミレニアム開発目標（MDGs）」を、2000年に世界のリーダーたちが決めました。その達成期限まであと1年足らずとなっています。しかしMDGsで掲げる8つのゴールと21のターゲットのうち、これまでに全世界で達成されたものはわずか4つ。教育・保健の欠如、紛争、気候変動、経済危機、食糧問題など現状を打破することを阻む様々な要因が点在しています。そんな中、「ポストMDGs」に向けて多くの関係者が議論をしており、国際開発の分野はまさに大きな節目に立たされているように思えます。

このような国際開発分野で活躍する人を一人でも多く輩出できるよう、“国際開発を志す若者のためのプラットフォームになる”という理念に基づき、IDPCは今年度も国際開発プランニングコンテストやワークショップ等様々なイベントを企画・運営してまいりました。本報告書を通して、第5回国際開発プランニングコンテストおよびIDPCの活動についてより多くの方々に知っていただくことが出来たら、幸いです。

今年度の活動を通してご協力いただきました、ゲストの皆様、協力会社の皆様、OBOGの皆様に、改めて厚く御礼申し上げます。私たちスタッフも国際開発業界を志す一人の若者として、皆様と交流できる貴重な機会を楽しませていただきました。IDPCは今後も若者達の夢を応援し、皆様の期待に応えるべく、精力的に活動を進めてまいります。今後ともご指導・ご協力のほど、宜しくお願い致します。

IDPC関東代表

東京工業大学 理工学研究科 国際開発工学専攻 修士2年
河合 彩里伊

IDPC関西代表

神戸大学大学院 国際協力研究科 国際開発政策専攻 修士2年
森本 和明

Contents

04 開催概要 —実施概要／企画の趣旨

07 東京会場報告

参加者の傾向 / 全体スケジュール / プランニング / プラン紹介 / 講演・講座 /
その他のコンテンツ / アンケート分析

21 大阪会場報告

参加者の傾向 / 全体スケジュール / プランニング / プラン紹介 / 講演・講座 /
その他のコンテンツ / アンケート分析

36 運営報告 —組織概要／活動詳細

開催概要

—実施概要

期間	2014年2月18日(火)—21日(金)3泊4日
場所	国立オリンピック記念青少年総合センター（東京） 大阪国際ユースホステル（大阪）
参加人数	29名（東京）、19名（大阪）
対象	国際開発に関心があり、将来当該分野で活躍する可能性のあるすべての人
参加費	16000円／人（宿泊費・食事代込）
主催	International Development for Progress and Change

開催概要

—企画の主旨

○コンテスト全体

国際開発の分野で活躍できる人材の育成に貢献することにより、途上国の発展に寄与する。

○ケース課題の意図

「豊かさ」とは…。日本国内問わず、人は豊かさを求めて生きている。「物質的」豊かさ、「文化的」豊かさなど、多様な視点で私たちは「豊かさ」を考えている。そして多くの発展途上国も経済成長の波に乗り、「物質的」な豊かさを実現させようとしている。今回の対象国であるバングラデシュもそのような段階にある。バングラデシュは低所得国に位置する貧困国とされているが、平均GDP成長率6%という急成長をしており、BRICsに次ぐ国の1つとされている。しかし2013年に起こったビル崩壊事故に見られるように、この急成長の背景には粗悪な労働環境で働かされている多くの人々が存在する。また経済成長の恩恵を受けられない人々との格差の広がりも見られる。NGOのメッカとも言われるこの国では多くの団体が様々な支援をしているが、現地の人々にとって本当の豊かさとは何か、プロジェクト立案を進めていく中で考える。

○事前課題

今大会では申し込みの段階で以下2点の設問を課した。

設問1：応募動機、このコンテストの経験を今後どのように活かしていきたいか

設問2：チームで何かを達成した経験、応募者の強みと思うところ

上記2点の設問から、参加者の国際開発に関する知識や経験、そしてチームプレーの経験の有無を把握し、4日間を共にするうえで大切となるチーム編成の参考とした。

○審査基準

審査方法は5項目、計100点満点とし、以下の審査項目と配点分配を用いた。

- 1、イノベイティブ性 (Innovativeness) : 30
ープロジェクトに独創性はあるか
- 2、妥当性 (Relevance) : 15
ー現場のニーズにあっているか、目的に対する事業内容であるか
- 3、持続可能性 (Sustainability):15
ープロジェクト実施後も効果の継続が期待できるか
- 4、受益効果 (Effectiveness) : 15
ープロジェクト実施による、受益者に与える生活向上への効果の規模
- 5、プレゼン力 (Presentation) : 25
ー心に響くプレゼンテーションであったか、図やグラフが効果的に示されているか、言葉や動作がわかりやすいものだったか

今回の審査項目に関しては、DAC評価5項目に基づき、若者ならではの発想力や国際社会の現場で必須とされるプレゼンテーション能力に関する項目を取り入れた。開発プロジェクト自体の評価による現実的な側面に加え、現地での経験が浅いからこそ自由な発想によって生まれるアイデアを期待した。点数配分もそのことに重きをおくためにイノベイティブ性およびプレゼン力の点数配分を大きくし、発想力やアウトプット力に特に注目した。

東京会場報告

—参加者の傾向

専門分野

参加者の所属先における専門分野は、経済学部、都市環境、哲学科、法学部、理学部、文学部、社会学部など多岐にわたり、様々なバックグラウンドを持つ参加者が集まった。みな自分の専門分野に加えて国際協力にも強く関心を持っていることが、プランニング内容の多様性にも反映された。

国際協力に直接関係のある専攻に所属している参加者は例年よりも少なかった。

学年

高校3年生	1
大学1年生	3
大学2年生	16
大学3年生	6
大学4年生	3
修士1年生	2
社会人	1

高校生から社会人まで幅広い層の参加者が集まった。友人同士の応募が多かった影響か、大学2年生が全体の50%を占めた。2月開催のため就職期間中であり、一時的に退席しながらもコンテストと就職活動を両立している大学3年生・修士1年生が見受けられた。

出身

関東だけでなく、仙台から2名、名古屋から1名、大阪から1名が参加。また今回のコンテスト課題国であるバングラデシュ出身の留学生が1名おり、プランニングだけでなくディスカッションや普段の会話を通して、バングラデシュをより深く知る機会や異文化交流にもなったようだ。

所属（五十音順）

青山学院大学、大阪大学、埼玉大学、首都大学東京、上智大学、創価大学、創価女子短期大学、中央大学、筑波大学、東京工業大学、東北大学、名古屋大学附属高校、日揮株式会社、放送大学学園、早稲田大学

全体スケジュール

Day1

開会式/アイスブレイク/目標設定/基調講演/プランニング

国際協力に関心を寄せる32名の参加者が集い、第5回国際開発プランニングコンテストが始まった。初対面のチームメイト同士、アイスブレイク・目標設定を通して打ち解けた。基調講演では“豊かさとは”という切り口で、国際開発について改めて考える時間となった。その後基調講演で得たヒントを基に、課題国：バングラデシュについてのプランニングが始まった。



Day2

プランニング/プレゼン講座/キャリアフォーラム

翌日の中間発表に向け、効果的でオリジナリティあふれるプランを練るため、各チーム熱心にプランニングに取り組んでいた。プレゼン講座では資料の作り方や話し方などプレゼンテーションのノウハウを伝授して頂き、中間発表・最終発表へのヒントとなった。キャリアフォーラムではお近い距離感でゲストと話し、各々の夢や将来について現実的に考える機会となった。

Day3

中間発表/テーマ講演/プランニング

中間発表では4名の審査員を前に、今までのプランニング成果を披露した。いただいたフィードバックを基に、最終発表に向けて改善点を考え直したり新しいアイデアを投入したりしていた。テーマ講演では課題国バングラデシュの現地の様子や近年の移り変わりについて学び、プランニングへの視野を広げた。明日の最終発表に向けてより一層真剣に議論しており、夜通し作業するチームもあった。



Day4

プランニング/最終発表/結果発表/フィードバック/閉会式/懇親会

4日間の集大成として、審査員及び全参加者に対して各チームが作り上げたプランの最終発表を行った。上位3チームの結果発表では大いに盛り上がり、お互いの努力をたたえ合った。また審査員から直接フィードバックをいただき、各々のプランニング過程や発表内容を振り返る時間となった。国際開発の関心や志を持つ仲間同士、この出会いを次のステージにつなげるべく、再会を約束した。

東京会場報告 プランニング

第5回国際開発プランニングコンテストでは、バングラデシュを課題国とした。NGO職員としてバングラデシュに派遣されるという設定で、各々が考える「豊かさ」を実現できるプロジェクトを立案した。バングラデシュは低所得国に位置する貧困国であり、アジア最貧国とも言われている。一方で平均GDP成長率6%という急成長をしており、BRICsに次ぐ国の1つである。バングラデシュで生活する人々は物質的に豊かとは決して言えないかもしれない。しかしこれは、援助国の価値観による意見かもしれない。——「豊かさ」というキーワードを通して、国際開発の在り方について今一度考える機会となったら、スタッフ一同の本望だ。

プランニングでは与えられた資料の分析・情報収集を行うことでバングラデシュの現状や課題を洗い出し、プロジェクトの立案を行った。既存の事業を模倣したようなプラン内容ではなく、プランニングの独創性を重要視し、各チームの個性やオリジナリティを期待すべく、評価項目はp6「審査基準」記載の5項目を設けた。



中間発表

コンテスト3日目、4名の審査員を招致して中間発表を行った。聴衆は審査員およびスタッフのみとし、他チームには非公開にて現段階までのプラン内容を発表した。各チームの持ち時間は発表時間7分、質疑応答およびフィードバック7分を設け、翌日の最終発表に向けてプラン内容をブラッシュアップするための貴重な時間となった。また前日のプレゼン講座を参考に、プレゼン方法にも力を入れている様子が印象的だった。全チームの発表後、評価総合点による上位3チームを発表した。

審査員からは多くのチームが「課題の洗い出し段階から再度見直すように」と指摘を受け、厳しいフィードバックへの落胆と、ひとまず発表を終えた安堵で参加者は複雑な様子だった。中間発表後、翌日の最終発表に向けてプランニングの追い込みが始まった。



最終発表

コンテスト最終日、5名の審査員を招致し、国際会議場にて4日間の集大成である最終発表を行った。持ち時間は発表7分、質疑応答7分を設け、各チーム熱心に議論したプラン内容を発表した。前日の中間発表にて審査員からいただいたフィードバックを基に、より良いプラン内容にすべく、多くの班が夜通し議論を続けていたようだ。大きな会場にて全参加者および審査員への発表は緊張したであろうが、皆堂々とプレゼンテーションに臨んでいた。

審査員からは、「中間発表で聞いた発表よりも、格段良いものになっていた。」「プラン内容のバラエティの豊かさは、IDPC史上1番だった。」「議論の進め方について、コンテストの冒頭で講義があると良い」などの意見を頂いた。



審査員紹介 (五十音順)

可部州彦様

明治学院大学教養教育センター教員 (社会起業家)

現在、明治学院大学教養教育センター教員 (社会起業) 及び笹川平和財団の「難民受入政策の調査と提言」事業メンバーとして、特に北欧調査及び難民の労働統合調査に関する。これまで、アメリカ California State Governmentにて母子家庭経済的自立支援策 (CaIWORKsプログラム) 担当官、NPO法人かものはしプロジェクトカンボジアオフィス代表、UNIAP (人身売買に関する国連機関間プロジェクト) 地域事業会議メンバーを歴任、専門は援助開発業界における社会的包摂を通じての社会的弱者の経済的自立・統合政策。

武鑑史恵様

国際協力NGO グッドネーバーズ・ジャパン

2003年日本大学生物資源科学部卒業。(公財) オイスカで開発途上国支援活動に従事。その間、オイスカ・インドネシア開発団に2年間駐在し、植林活動や地域開発プロジェクトのマネジメント業務を行う。その後、2011年東日本大震災の緊急救援活動に従事。同年7月にグッドネーバーズ・ジャパンに加わり、震災復興支援部として平成25年4月まで復興支援活動を行う。5月より同団体ファンドレイジング部に勤務。

筒井哲朗様

特定非営利活動法人 シャプラニール=市民による海外協力の会 理事・事務局長

1986年～1989年 青年海外協力隊員としてバングラデシュ派遣 / 1989年～1993年 民間企業で勤務 / 1994年～1996年 シャプラニール=市民による海外協力の会入職 / 1994年～96年 同会バングラデシュ駐在員 / 1996年～98年 同会東京事務局 (フェアトレード部門) / 1998年～01年 同会ダッカ事務所長 / 2001年～02年 同会東京事務局 国内活動グループ課長 / 2002年～08年 同会事務局次長 / 2008年～現在 同会理事・事務局長

角田学様

JICA 国際協力専門員(高等教育・技術教育)

東京工業大学工学部助手を務めた後、JICA専門家として、ケニア国ジョモケニアッタ農工大学プロジェクト、タンザニア国ソコイネ農業大学地域開発センタープロジェクトなど、東アフリカで約17年間活動。その後、アセアン工学系高等教育ネットワーク、エジプト日本科学技術大学、インドネシアのハサヌディン大学などのプロジェクト現場を約8年間担当。現在、アフリカ・中東・アジア諸国の案件形成・実施・評価などに幅広く従事。地域開発・住民参加型フィールドワークも得意とする。

脇坂知典様

アイ・シー・ネット株式会社 コンサルティング事業部

2002年に公認会計士試験に合格し、監査法人トーマツで約6年間、外資系金融機関による投資スキームの会計監査に携わる。英国の大学院で紛争解決学修士を取得し、国際NGOに参加。紛争後の地域で、住民たちの和解促進を支援した。アイ・シー・ネット入社後は、ナイジェリアで農産物の加工業者が金融機関の融資を受けるための調査や、アフリカ地域への日本企業の進出支援の調査に従事。現在は、アイ・シー・ネット主催の「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」に携わる。



プラン紹介

第1位

Aチーム

大島光洋、大村瑠雅、星野仁美、村岡雅裕、山崎智美

「ドーナツで栄養不足を解消せよ」

抹茶玄米ドーナツの販売を通して、貧困層の栄養不良問題を解消する。バングラデシュでは限られた食費や環境により、主食であるコメの偏食が進んでいる。これによる栄養素不足問題に対し、多くの栄養素を補充している抹茶玄米に注目した。抹茶玄米ドーナツが家庭の食習慣に定着することを目的とし、ドーナツの販売および手作りキットの販売を考案した。



第2位

Eチーム

太田優人、重富由貴、中澤舞、原澤優斗、山本たくみ

「E+プロジェクト」

家庭学習システムの確立および経済面における農家支援を通して、教育の質向上を目指す。スマートフォンを用いることで、都市部の大学生に質問が来、またゲーム感覚で復習できるアプリを普及させる。さらにスマートフォンを電子帳簿として利用したマイクロファイナンスシステムを構築し、農家へ適正価格や天候に関する情報を提供する。



第3位

Gチーム

木村和則、久野新太郎、桑原未来、竹本舞、ホサイン・モハンマド・マルフ

「Star Teacher Project」

教員の教育能力に関する認証事業を行うことで、授業の質的向上を図り、就学率を向上させる。初等教育と中等教育の現状および目標値のギャップに着目し、教員のモチベーションを向上させることで授業の質的向上そして就学率向上を期待できると考えた。報告書審査や成果検証など3ステップを構え、合格した教員にランク別認証を行う。



プラン紹介

Bチーム

江口紗穂里、加藤彩菜、篠崎貴司、矢野新太郎

「アノンドバリ」

アノンドバリ=ベンガル語で“楽しい家”。家のないシングルマザーにシェアハウスを提供することで、住居の確保・社会とのつながり・経済支援を行う。「低賃金のシングルマザーは子どもに教育機会を与えられず、職に就きにくい」という負のサイクルを、シェアハウス提供により打破することを期待する。

Cチーム

金城花蓮、川渕進司、玉置直人、西原千尋

「マイクロプロジェクト」

マイクロ水力発電の設置により、農村部の電気利用可能範囲を広げる。マイクロ水力発電は他発電方法に比べて、低コストで環境に優しく、地元の材料で運営できるため持続可能である。貧困率が高く、乾期が無い南部地域を対象としてプロジェクトを行う。

Dチーム

浦上真騎、後藤あゆみ、永田観月、平野いさむ、眞鍋大

「YOU CAN RETRY」

漫画のふきだし翻訳を通して、識字率の向上を目指す。識字率が低いことにより、生活の質が低く、自然災害による被害の恐れが拡大している現状を、克服すべき課題として考えた。漫画の翻訳によって識字率向上を目指すことで、雇用機会の増加や独学ツールの利用、災害に関する的確な理解が期待できる。

Fチーム

嶋村梨穂、鈴木達也、妹尾真宏、古谷彩乃

「パートナーシップによる労働環境改善プロジェクト」

縫製企業に対して縫製技術教育・キャリアアップ教育を行い、生活環境・労働環境の劣悪さの改善を目指す。男女格差や地域格差によるバングラデシュの不平等な社会構造に着目し、NGOが縫製業とパートナーシップを結ぶことで、縫製技術やキャリアアップ教育、賃上げを期待する。

基調講演 「豊かさとは」

講演者平山様は現在インドネシアでJICAの専門家として活躍されており、ブータンに関する本を数々執筆されている。自身が青年海外協力隊時代にブータンの家庭で厚いもてなしを受けた経験より、「GDP計算で一人当たり一日ドル以下の収入＝貧困家庭」という国連の既定に疑問を感じた。これらの基準は外部の価値観で決めつけられているものではないのか？ 単純に彼らを貧乏と呼んでよいのか？ 彼らは自身を貧困だと思っているのか？ 現地の指導は自分の尺度を押し付けているだけではないか？...など疑問を持ち、葛藤したという。

「そもそも豊かさを観る視点には、知識や経験に基づくものや職業選択の自由など多種多様であるはずだ。」

国際協力を進めていくうえで重要なことは、相手との違いを否定するのではなく、ものごとの裏にある理由を知ることによって相手の文化を理解すること。条件や環境の違いを前提とし、その上で相手を理解しようとする。日本と比べてどうか・なぜ自分はそう考えるのかと問うこと。

経験に基づくお話は、参加者にとって非常に新鮮で、印象的であったようだ。

講演者

平山修一様 JICA専門家 / GNH研究所代表幹事

国際開発コンサルタント（ガバナンス分野）、一級建築士。早稲田大学大学院アジア太平洋研究科国際関係学専攻修士課程修了後、(株)シーエスジェイ調査企画部に主任研究員として勤務。現在、放送大学非常勤講師、大東文化大学兼任研究員ブータン、モンゴル、タイでのODA業務を通じて、途上国の経験や考え方を日本の地域作りに生かせないかとの問題意識を持ち、これの実践を目指している。著訳書に「現代ブータンを知るための60章」（明石書店）、「ダワの巡礼～ブータンのある野良犬の物語～」(段々社) など多数。GNH研究所代表幹事、日本GNH学会副会長などを務める。また5代目ブータン国王が結婚式を挙げられたプナカ城のクンレイ（金堂）の設計・施工監督者としても知られる。

参加者の声

国際開発に関して現場で学んだことや知識は、いつか日本に活かせる という考え方にハッとした。私たちは援助している側に立っているだけでなく、得ていることもたくさんあるということを忘れずに、今後も勉強を続けたい。



東京会場報告

講演・講座

キャリアフォーラム

国際協力への携わり方は多種多様であり、立場によって仕事内容や当該業界への視点は異なる。キャリアフォーラムでは国際協力に関わる職に就いている方々をゲストに招致し、ブースごとに直接お話ししたり質問をしたりすることで、将来の道を改めて考えるためのヒントを得ることが出来た。

参加者の声

- ・現職者の方々と直接お話しすることで、国際協力の世界をより身近に感じられるようになった。
- ・国際開発に携わる道を新たに知ることができ、選択肢が広がった。これから自分の将来を考えるために役立った他、やる気にも繋がった。
- ・難民の受け入れ、教育改革の話に感動、涙してしまいました。
- ・現場の方の本音が聞け、自分自身どんな仕事に興味があるのか知る機会となった。

ゲスト（五十音順）

石井絵里様

日本貿易振興機構（JETRO）

2013年日本貿易振興機構入構、途上国と日本とのビジネス開発支援を担当する途上国貿易開発部開発支援班に所属。日本企業のアフリカ産品の輸入支援事業やイランの包装技術産業の育成事業を担当している。



澤田茉莉様

日本貿易振興機構（JETRO） 途上国貿易開発部 アジア支援課

2012年日本貿易振興機構入構、アジアの産業育成支援を担当する途上国貿易開発部アジア支援課に所属。ベトナムの機械部品やインドネシアの伝統産品等の対外輸出拡大に向けた育成支援事業を担当している。



玉置知己様

アジア開発銀行駐日代表事務所 駐日代表

2013年2月アジア開発銀行（ADB）駐日代表事務所（JRO）駐日代表に着任。同代表は、1995年にプログラムズ・オフィサーとしてADBに入行。1998年一旦退職後2007年4月プリンシパル・カントリー・エコノミストとして復帰。直近は中央・西アジア局でプリンシパル・リージョナル・エコノミストとして同地域の経済分析、同地域内のADB加盟国とのカントリーパートナーシップの策定等に従事。一橋大学経済学学士、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(英国)経済学修士号取得。



鶴木由美子様

認定NPO法人難民支援協会 定住支援部チームリーダー

慶應義塾大学教育学専攻、カリフォルニア州立大学大学院ノースリッジ校にて異文化コミュニケーション学修士課程修了。移民の子どもたちの教育的・経済的支援をする団体でのインターンなども経験。児童福祉業界の人材支援・経営支援を行うソーシャルベンチャーでの勤務を経て現職。



行方一正様

株式会社エイチ・アイ・エス 取締役相談役

1978年 10ヶ月ほど陸路で世界一周

1985年 株式会社エイチ・アイ・エスに入社

2004年 代表取締役常務取締役 人事・経理・関係会社・総務担当

2005年 代表取締役専務取締役

2008年 取締役相談役

2011年 取締役相談役CSR担当（現職）

松尾沢子様

（特活）国際協力NGOセンター（JANIC） 広報グループマネージャー

94年大学卒業後、独立行政法人国際協力機構（JICA）に入職。研修員受入れ事業や市民参加型事業に関する事業企画・予算管理、外務省出向や海外NGOでインターンを経験。2008年にJANICに転職。NGOの広報および組織強化やNGOの社会的責任に関するマネージャーを務める。



宮崎潤様

国際協力機構（JICA） 資金・管理部市場資金課

2006年東京外国語大学英語科卒業。新生銀行、モルガン・スタンレーMUFJ証券、バークレイズ銀行にて、7年間為替取引の営業を経験。2013年中途採用でJICAに転職。現在は、途上国向け無担保長期融資業務の金利リスク、為替リスクヘッジのためのデリバティブ取引、資金調達のための債券発行業務などを担う。仕事外の活動では、国連フォーラムにて途上国スタディープログラムの企画などを行う。

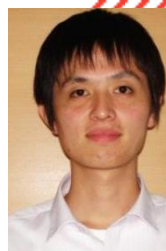


武藤正樹様

アイ・シー・ネット株式会社 経営管理部 人事・総務グループ

2007年3月に大学卒業後、精密機器メーカーで新卒採用・総務を担当した後、

2011年10月にアイ・シー・ネット株式会社へ入社。人事採用・総務・広報業務等に従事。



脇坂知典様

アイ・シー・ネット株式会社 コンサルティング事業部

2002年に公認会計士試験に合格し、監査法人トーマツで約6年間、外資系金融機関による投資スキームの会計監査に携わる。英国の大学院で紛争解決学修士を取得し、国際NGOに参加。紛争後の地域で、住民たちの和解促進を支援した。アイ・シー・ネット入社後は、ナイジェリアで農産物の加工業者が金融機関の融資を受けるための調査や、アフリカ地域への日本企業の進出支援の調査に従事。

現在は、アイ・シー・ネット主催の「40億人のためのビジネスアイデアコンテスト」に携わる。



講演・講座

プレゼン講座—明日使えるプレゼン技術—

人前でプレゼンテーションをする際の心構えや、物事を効果的に伝えるためのコツを学ぶ機会とした。またコンテスト最終日のプラン発表にさっそく活かせるよう、資料の作り方や話し方など具体的に教えていただいた。自己紹介を通してプレゼンを実践し、各々の発表を振り返った。プレゼンテーションといっても多種多様であり、プレゼンの目的や対象によって発表方法を工夫する必要があることを実感できる内容であった。

講演者

田中耕比古様 株式会社GiXo

株式会社ギックス取締役。2000年、関西学院大学総合政策学部卒業。アクセンチュア株式会社戦略グループにて多くの業界・領域のコンサルティングプロジェクトに従事した後、日本IBM株式会社に転職、ビッグデータやアナリティクスなどのサービスを提供するBAO (Business Analytics & Optimization) のビジネスソリューション開発を行う。2012年、株式会社ギックスを設立し、「顧客に答えを伝える」のではなく「顧客と共に答えを探す」ことをモットーに顧客企業の価値創造を支援。

参加者の声

プレゼンについての講義を受けたことがないため、非常に良い機会になった。講師の田中さんが面白く分かりやすく講義してくださり、楽しみながら学ぶことが出来た。今回得たテクニックを今後是非使っていきたい。



東京会場報告

講演・講座

バングラデシュ国際協力講座

コンテストのプラン内容をより深めるため、課題国であるバングラデシュについて講演していただいた。講演では動画を用い、現地の様子や十数年間の変化について解説していただいた。国際援助を行う際は新しい技術を持ち込むのではなく、現地に主体を置いて活動を進められるような内容にするべきだ。その点で、バングラデシュは援助の見本国だという。

講演者

筒井哲朗様

特定非営利活動法人 シャプラニール=市民による海外協力の会 理事・事務局長

1986年～1989年 青年海外協力隊員としてバングラデシュ派遣

1989年～1993年 民間企業で勤務

1994年～ シャプラニール=市民による海外協力の会入職

1994年～96年 同会バングラデシュ駐在員

1996年～98年 同会東京事務局（フェアトレード部門）

1998年～01年 同会ダッカ事務所長

2001年～02年 同会東京事務局 国内活動グループ課長

2002年～08年 同会事務局次長

2008年～現在 同会理事・事務局長

その他

特定非営利活動法人開発教育協会（DEAR）理事

東京ボランティア・市民活動センター運営委員

東京都国際交流・協力TOKYO連絡会運営委員

参加者の声

現地の様子や筒井さんがバングラデシュで感じたことなど、ネットや文献では手に入らない情報を得ることが出来た。私もバングラデシュに行き、自分の目で現状を見てみたいと思った。



その他のコンテンツ

開会式

第5回国際開発プランニングコンテストの幕開けとして、代表挨拶、スケジュール確認、各プログラム内容説明を行った。



アイスブレイク

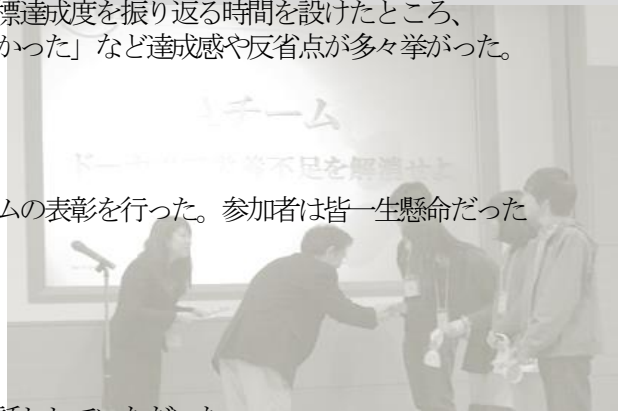
初対面同士の緊張感をほぐすため、自己紹介を兼ねたゲーム（ごきげんようサイコロ）を行った。4日間共に切磋琢磨し合う仲間同士、お互いを知る機会となった。

目標設定

IDPCに参加する目的を明確にし、各チーム/各個人の目標設定を行った。より充実した4日間を過ごすため、ここで設定した目標を胸に、コンテストに取り組んだ。最終日に各々の目標達成度を振り返る時間を設けたところ、「チームの役割分担がうまくいった」「計画的に作業が進められなかった」など達成感や反省点が多々挙がった。

結果発表

各チームの最終発表を5名の審査員に評価していただき、上位3チームの表彰を行った。参加者は皆一生懸命だっただけに、第一位発表の際には大きな歓声が上がった。



フィードバック

最終発表に対するフィードバックを、審査員から各チームへ直接お話していただいた。フィードバックを通して、参加者はプランニング内容の良かった点や改善点を振り返り、より多くの気付きを得ることが出来た。近い距離で審査員と話せる時間でもあるため、参加者から積極的に質問する姿やアドバイスを乞う姿が目立った。

閉会式

翌月開催されるIDPC大同窓会での再会を約束し、代表挨拶を以て第5回国際開発プランニングコンテストは幕を閉じた。



アンケート分析

全体について—

例年に比べ、大学2、3年生の参加者が多かった。

「様々なバックグラウンドを持つ人達と話すことで視野が広がった」「専門家の方の生の声を聞くことができたのが良かった」といった意見が多く見られ、9割近くの方が、満足・やや満足と回答しており、参加者の一定の期待に応えられた。しかしその一方で、ネット環境に不満を感じた参加者も多く、来年度以降への課題が残った。

プランニングについて—

コンテストの難易度について、アンケートでは約8割の参加者が、難しかった・どちらかといえば難しかったと回答した。その理由として、今年度から「豊かさとは何か」という明確な答えのないテーマを加えたことが考えられる。定義づけや、プレゼンの中で、どこまで言及すべきかに悩むチームが多く見られた。

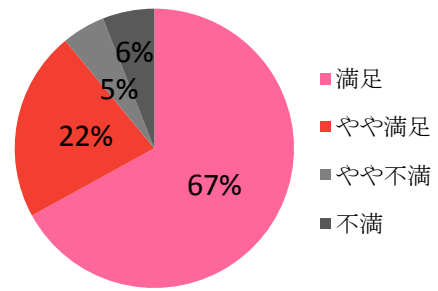
サブコンテンツについて—

キャリアフォーラムの人气が高く、「自らが抱いていた疑問が解決した」「自分のやりたい仕事が少し明確になった」等の声があった。その他コンテンツでは「豊かさのお話が面白かった」（基調講演）、「プレゼン作りの参考になった」（プレゼン講座）「ケース課題で学んだ自分の知識が立体的になった」（バン格拉デシュ講座）と意見が挙がり、サブコンテンツに対する満足度は非常に高かった。しかしディスカッションに関しては、「時間が足りない」など改善点が多く見られた。またバン格拉デシュ講座を開催するタイミングに関して、「もう少し早い段階でしてほしい」との声があり、来年度以降検討すべき点が明確となった。

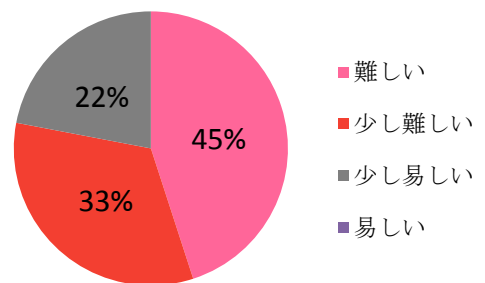
コンテストの目的について—

コンテストに対して多くの方が満足している一方で、国際開発に必要な能力が身についたと感じた参加者は全体の約6割に止まった。「これから時間をかけて身につけたい」「自分に足りない能力がわかった」「自らの価値観を押し付けられないことの重要性を再認識した」「他者の視点を重視することが大切だと感じた」といった意見がみられた。国際開発に必要な能力の1つである、チームでプロジェクトを進める能力が身についた、と感じた参加者が多かった。

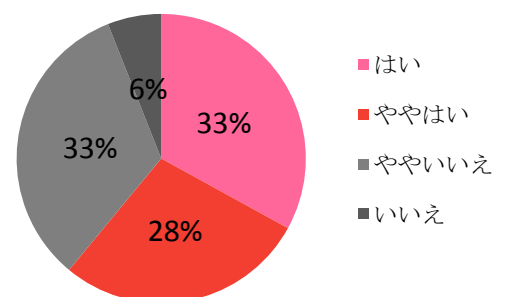
▼コンテスト全体について



▼コンテスト難易度について



▼国際開発に必要な能力は身に付いたか



大阪会場報告

—参加者の傾向

専門分野

参加者の所属先における専門分野は、工学部、農学部、法学部、外国語学部、社会福祉学部、総合人間学部など多岐にわたり、様々なバックグラウンドを持つ参加者が集まった。みな自分の専門分野に加えて国際協力にも強く関心を持っていることが、プランニング内容の多様性にも反映された。特に今回のコンテストにおいては公共政策に直接関係のある専攻に所属している参加者が多かった。

学年

高校3年生	1
大学1年生	1
大学2年生	11
大学3年生	3
大学4年生	2

大学2年生を中心に高校生も交え、学年の若い層の参加者が集まった。大学2年生が全体の60%を占めた。2月開催のため就職活動期間中であり、一時的に退席しながらもコンテストと就職活動を両立している大学3年生も見受けられた。また大学院に進む前の学びの場として参加している大学4年生も見られた。

出身

主に関西在住の学生が参加。また中国出身の留学生が1名おり、プランニングだけでなくディスカッションや普段の会話を通して異文化交流にもなったようだ。

所属（五十音順）

大阪大学、関西学院大学、京都大学、同志社大学、兵庫県立芦屋国際中等教育学校、武庫川女子大学、立命館大学

参加者の傾向

Day1

開会式・アイスブレイク・目標設定・基

調講演・開発ディスカッション・交流会

大阪会場では国際開発に関心のある19名の学生が集まった。開会式後グループ毎にアイスブレイクと目標設定でチームビルディングを行った。基調講演では途上国の豊かさについての講演をして頂き、参加者からは多くの質問が投げかけられた。その延長線として、講演者の方と一緒に「開発とは何か」について議論した。初日最後は交流会としてカレーをつくり、仲を深めた。



Day2

プランニング・プレゼン講座・

キャリアフォーラム

二日目から本格的なプランニングを開始した。まずは与えられた資料等からバングラデシュの情報収集をしたり、プロジェクトを行う際の「豊かさとは」を議論したり、班によって様々だった。プレゼン講座では講師の方のお話を聞くだけでなく、参加者が実際に対話やプレゼンをすることで、その難しさを実感した。キャリアフォーラムでは5つのブースに分かれて、様々な職種から開発業界でご活躍されている方々と仕事内容やキャリア形成についてお話を頂き、参加者からは多くの質問が挙がった。



Day3

プランニング・中間発表・テーマ講演

中間発表前のプランニングでは、プロジェクト概要を作成し、中間発表に向けて準備した。発表後には審査員の方々から各グループに個別フィードバックを頂き、参加者は真剣にメモを取っていた。テーマ講演では現地の写真を見ながらバングラデシュの問題点を知ることが出来た。夕食後には多くのグループが最終審査に向けて発表の準備をしていた。

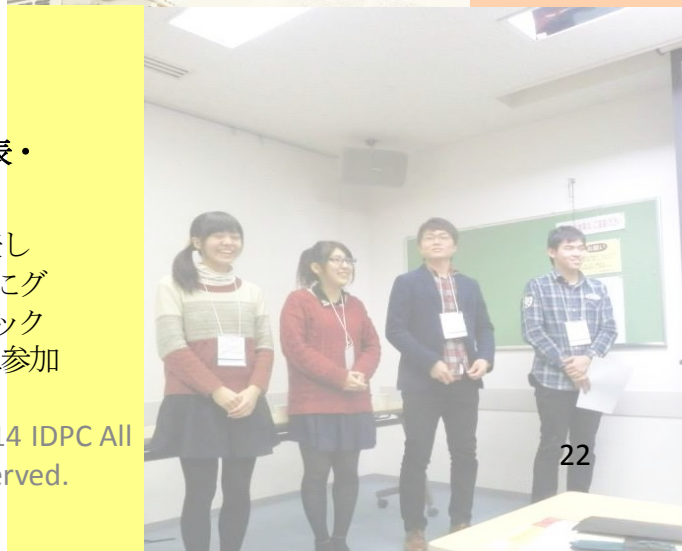


Day4

プランニング・最終発表・結果発表・

フィードバック・閉会式・懇親会

各グループが4日間の集大成であるプロジェクトを発表した。審査員からの総括を頂き、さらに中間発表と同様にグループ毎にフィードバックをいただいた。フィードバックを通じて4日間のプロジェクト立案を振り返り、最後に参加者全員が感想や将来への想いを発表した。



プランニング

第5回国際開発プランニングコンテストでは、バングラデシュを課題国とした。NGO職員としてバングラデシュに派遣される設定で、各々が考える「豊かさ」を実現できるプロジェクトを立案した。

バングラデシュは低所得国に位置する貧困国であり、アジア最貧国とも言われている。一方で平均GDP成長率6%という急成長をしており、BRICSに次ぐ国の1つである。バングラデシュで生活する人々は物質的に豊かとは決して言えないかもしれない。しかしこれは、援助国の価値観による意見かもしれない。——「豊かさ」というキーワードを通して、国際開発の在り方について今一度考える機会となったら、スタッフ一同の本望だ。

プランニングでは与えられた資料の分析・情報収集を行うことでバングラデシュの現状や課題を洗い出し、プロジェクトの立案を行った。既存の事業を模倣したようなプラン内容ではなく、プランニングの独創性を重要視し、各チームの個性やオリジナリティを期待すべく、評価項目はp6「審査基準」記載の5項目を設けた。

中間発表

コンテスト3日目、4名の審査員を招致して中間発表を行った。他の参加者の前で、最終発表しながら現段階までのプラン内容を発表した。各チーム発表後には審査員・参加者から質疑応答の時間を設けた。また全体の発表終了後、各チーム4名の審査員から個別にフィードバックを頂く時間をとった。翌日の最終発表に向けてプラン内容をブラッシュアップするための貴重な時間となった。

審査員からは「まずはニーズの洗い出し、ターゲットを明確に」「他国との比較やデータを示した方が良い」「ステークホルダーが洗い出せていないのでは？」といったアドバイスを受けた。

審査員（五十音順）

井上和雄様	株式会社パデコ理事
上須道徳様	大阪大学環境イノベーションデザインセンター 特任准教授
小吹岳志様	オイコクレジット・ジャパン 事務局長、フェアトレード・サマサマ 事務局長
敦賀和外様	大阪大学グローバルコラボレーションセンター

最終発表

コンテスト最終日、3名の審査員を招致し、4日間の集大成である最終発表を行った。各チーム熱心に議論したプラン内容を発表した。前日の中間発表にて審査員からいただいたフィードバックを基に、夜を徹してプランニング作業を行っていたチームが多かった。プレゼンテーション講座で教わった「伝えるではなく伝わる話し方」を意識し、皆堂々とプレゼンテーションに臨んでいた。

審査員からは、「イノベティブ性が高かった。必ずしも誰も思いつかないことではなく、異なるアイデアを結び付け新しい価値を生み出すことがイノベティブ。プレゼン自体も良かったし、これからどんどん現場にでていってほしい。」「立案時に最も重要なことは、問題分析。やりたい!ではなくて必要なもの。それは原因を突きつめれば出てくる。時間的・資金的制約の中でいかに効果のあるものを作り上げていくかを考えてほしい。イノベティブ性は高く面白かった。柔軟さを大事にしてほしいと思う。仕事おいやでも現場がわかるから、選択肢を消してしまうから。しかし、この仕事の面白いところは常に支援対象を向いていないといけなところでもある。ドナーの意志をくみつつ、地域の人を見続ける姿勢を持ってほしい。」と、コメントをいただいた。

審査員（五十音順）

上須道徳様



大阪大学環境イノベーションデザインセンター特任准教授

早稲田大学を1996年に卒業、ミネソタ大学より2008年にPh.D.を取得（専門は環境経済学と開発経済学）。大阪大学には2006年8月に着任、アジアを主な舞台として環境やサステナビリティに関するテーマで工学や自然科学、人文科学の研究者とともに研究を行っている。また、大阪大学でのサステナビリティ教育プログラムの立ち上げ運営にかかわり、全学の学生に環境や持続可能な開発を学ぶ機会を提供してきた。

小吹岳志様



オイコクレジット・ジャパン事務局長、フェアトレード・サマサマ事務局長

商社勤務のあと様々なボランティア活動、社団法人アジア協会アジア友の会（NGO）スタッフを経て、1999年より現職。ベトナム・ビルマ・ネパール・バングラデシュなど、南・東南アジアの生産者団体、NGOとの取引を通じ、農村女性や難民、貧困層など社会的弱者の経済的自立支援に取り組む。また他のNGOや学校・大学・行政機関などと協力し、ワークショップやセミナーなどを開催、フェアトレードの普及に努める。さらに現在は、主に途上国のマイクロファイナンス機関等に融資しているオイコクレジット・ジャパンの事務局長も務める。他にフェアトレードタウン・ジャパン理事、ワンワールドフェスティバル実行委員長など。

田中一弘様



（特活）AMDA社会開発機構 海外事業部部長

1976年兵庫県生まれ。関西学院大学経済学部卒。米国オハイオ大学大学院国際開発プログラム修士課程修了。2000年よりAMDAのスタッフとしてアジア・アフリカ・中南米地域における国際協力事業に従事。2009年より現職。

プラン紹介

第1位

チーム西日本

北尾亮太、佃優希、西田有佳、堀尾麗華

「ボナプロ ～洪水避難促進プロジェクト～」

人々の生活において安全・安心を確保するための洪水対策を立案した。既存のシェルターが機能していないことの原因として、精神的油断と避難によるコストを見出した。シェルターに写真館やプリクラ屋を作るというユニークさと実現可能性が評価され、優勝となった。



第2位

チームMt.Mont Blanc

浅井広大、川崎真菜、白方健、森田美七海

「洪水対策」

洪水対策によるBNHの充足を目指した。洪水での死亡者数が多い背景として、人々が逃げる必要性を感じていないという現状に注目。洪水に関する知識を習得するために、ハザードマップの作成や応急救護の指導、土嚢の製作を行うワークショップを開催する。参加へのインセンティブとして非常食の試食や救命道具の配布を行う。現地の人々が受け入れやすい方法をとっており、実現可能性が高い点が評価された。



第3位

チームぐちゃぐちゃバンバン

板倉美聡、窪健志、立山奏子、森美沙希

「STOP! 児童婚プロジェクト」

児童婚が女性の人権や教育機会、生命に負の影響を与えている事実に対し、児童婚に対処するためのプロジェクトを立案した。具体的には、女性たちの洗濯コミュニティの形成によるエンパワメント、児童婚経験者の中からの伝道師採用、既存の児童婚対策組織による伝道師へのトレーニング、権力者を通じた親への啓発を行う。これにより、児童婚防止と児童婚経験者へのアフターケアを目指す。バングラデシュの習慣を活かした工夫が評価された。



プラン紹介

チームラロト

井上愛子、酒井肇、山本浩大

「バングラデシュ交通プロジェクト」

交通事故という、見逃されがちな途上国の課題を取り上げた。交通事故が原因で貧困に陥ってしまう人々を減らすため、危機意識と交通マナーの欠如に注目。第一段階として家族の写真や交通事故の写真を用いたステッカー危機意識の向上、第二段階では交通安全教室によるマナーの向上、第三段階で行政に対してインフラ整備の提言運動を行うことを目指した。

チームフルート

清衣里奈、張騰月、福田健太

「女性の雇用創出プロジェクト～マンゴー加工産業創出inバングラデシュ～」

女性が現金収入を得る機会をつくることで、家庭内での地位向上を目指した。マンゴーの生産が盛んな地域で、加工してドライマンゴーにするという付加価値をつけた。NGOは加工技術の指導とマンゴー購入のための資金援助、出荷までのシステム構築を担う。



基調講演 「バングラデシュの豊かさとは」

今年度の大会コンセプト「豊かさとは」を考える機会とするため、日本のNGOが国際開発の分野に進出したきっかけや、バングラデシュにおける中田様の実体験を講演していただいた。中田様は日本においてインドシナ難民に出会われてNGOの世界で働かれるようになった。赴任先として訪れたバングラデシュ。当初は最貧国だったが、今では被援助国の優等生であり、首都ダッカは急速な近代化が進行している。その反面、階級社会であることから格差は拡大しており、ビジネスチャンスは上の階級からありつけることから、貧富の格差は縮小しにくい。一方でそういった格差が存在し、近代化の波による自然の減少など全体的に荒々しさがあるものの、バングラデシュ人らしさは失われていない。バングラデシュ人らしさというアイデンティティを忘れずに更なる成長をしていくことで真の豊かさを実現できるようになるのではないかな。

途上国開発をするうえで、本来「ニーズ」などは存在しないという。我々外部の者が、何を見つけるか次第なのだ。つまり、援助団体や企業がウォンツをつくってしまう。重要なのは、皆で詰めて「考える」ということ。そうすればニーズに立脚しているかどうかわかってくる。

講演者

中田 豊一 参加型開発研究所代表 / 市民活動センター神戸理事長 / ソムニード代表理事
1956年愛媛県生まれ。東京大学文学部卒。イエズス会社会司牧センター職員、アジア学院農場ボランティアなどを経て、1986年から89年の間、(特活)シャプラニール=市民による海外協力の会ダッカ駐在員としてバングラデシュに駐在。(社)セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン事務局長などを務めた後、2004年2月から2年間、JICA(国際協力機構)の森林管理住民支援プロジェクトの専門家としてラオスで活動。2007年～2013年の6年間、シャプラニール代表理事を務める。現在、参加型開発研究所代表。非常勤の役員として、(特活)市民活動センター神戸理事長、(特活)ソムニード代表理事(共同代表)。神戸市在住。主著、「ボランティア未来論—私が気づけば社会が変わる」(コモンズ、2000年)第4回(2001年)日本自費出版文化賞研究・評論部門賞受賞、「途上国の人々との話し方..国際協力メタファシリテーションの手法」(みずのわ出版、2010年10月)など



開発ディスカッション

今大会のテーマ「豊かさとは何か」。豊かさは技術で達成できるのか？途上国の発展には先進国の援助が必要か？国際開発の根本に関わってくるこれらの問いに、一つの視座を提供してくれるのがバンカーロイのTEDスピーチだ。今回は参加者にスピーチ動画を観てもらい、それぞれの考えをチーム内で共有し、議題を設定してもらった。設定した議題から「国際開発の意義・バランスをどうとるべきか」、「外国人として開発に携わる意義」という2つの議題を選び、チームの垣根を越えてディスカッションを行った。

また、基調講演をして頂いた中田豊一様に一連の議論の様子を見ていただき、総評を頂いた。なかでも「自分の周りにいる人を想像して取り組め。人間力が問われるのだ。」という言葉は、多くの参加者がはっとさせられたのではないだろうか。

「議論の時間がまだまだ足りない」といった声も多く聞かれ、翌日からのプランニングで豊かさとはなにかの定義からスタートして取り組んでいる様子も見られた。この時間が参加者にとって有意義な時間だったと思える。

それぞれのチームから出た議題

- ・先進国と途上国では発展の終着点が違う。発展という言葉の意味とは？
- ・外国人が開発にかかわっていく意義は？
- ・他の場所でバンカーロイのような取り組みが成功しているのは聞いたことが無い。なぜ？
- ・内的発展が協調されるが、外的な作用も必要で、そのバランスが重要だ。バランスのとり方とは？
- ・そもそも国際開発をするべきか？

議題1：国際開発の意義・バランスをどうとるか

国際開発はすべき。リスクを減らし、よりよい生活を送るため。グローバル化、情報化で「やめられない国際開発」になっている面がある。バランスのとり方は、現地の人の声を、経済的段階に分け聞く。外と中の両方の人がバランスをとる環境・体制をつくろう。援助をあくまでも補完的と位置づける。

議題2：外国人として開発に携わる意義

発展の終着点のバリエーションを考えるとともに、ベースラインを想定する。比較から提供できるものがある。

中田様からの総評

今のような、援助の形が必要かどうかはわからない。枠組みがあるからやっているだけなのかもしれない。何らかの理念から始めたNGOはないのだ。出会いがあって、始める。始めてから考える。つまり、顔が見える人から考えたい。自分の周りにいる人を想像してほしい。



プレゼン講座

リンク・アンド・モチベーションに入社し、企業と学生の就職活動をお手伝いされてきた五十嵐順康様をお招きし、今回は小手先のプレゼンテーションのノウハウを伝授するのではなく、もっと基礎的なコミュニケーションへの理解を深めることを目的に、講演していただいた。

まずはコミュニケーションを体験してみよう！ということで、3つのワークを実践。1つ目は、無反応な人を相手に、自分が夢中なものについて一方的に話し続ける「お地藏さん」ワーク。どんなに熱心に話しても、うなづくことも、笑顔を見せることもない相手。そんな会話では、話のネタもすぐに尽き、気分も落ち込んでしまう。実は話し手ではなく、聞き手が会話を作っているということに気づかされる。次は、複雑な図形を言葉のみで伝える伝言ゲーム。これがなかなか難しい。A4の紙の左側には縦長の楕円が一つ、右側には四角と三角が重なったものが一つ。相手に、図形を正確に描いてもらうには、まずは大きな構成から伝え、相手と前提を共有する必要があることを、身をもって学ぶ機会となった。「伝える」と「伝わる」ことは別、ということだ。最後は90秒の自己紹介プレゼン。聴衆はプレゼンを客観的に評価し伝える。最初は受け入れがたく思えるフィードバックも、まずは信じてやってみる。その後、合う合わない、納得できるできない、と選び取ってゆくのが大切だと語ってくださった。

お話のなかで一番印象に残ったこと。それは、話をする時「自分は相手にどんな人間だと思ってもらいたいのか」と考え、そうしてもらうためにどう振舞うかを考え、実践を重ねていらしたということ。話す内容だけではなく、声の発し方や身振り手振り、その日の服装に至るまで、相手に「こんな自分に思ってもらおう」と工夫を凝らす。このコミュニケーションを設計する意識が、日々のコミュニケーション、ひいては人間関係を変えてゆくと学んだ。

「頭がスパークする感じが何度もありました」とは、参加者からの感想。大好評の講座であった。五十嵐様、ありがとうございました。

講師

五十嵐順康様 株式会社リンク・アイWESTユニット リーダー

早稲田大学商学部卒。「成長」を軸に就職活動を行い、大手・ベンチャー問わず10社近くの会社から内定を頂くも、リンクアンドモチベーションに進むことを決意。自社の新卒採用に重視し、責任者を務めた採用イベントが、セミナー満足度ランキング1位を獲得。2008年には企業の採用コンサルに移動し、大手企業を中心とした多くの企業の採用支援を行う。その後リンク・アイの前身となるレイズアイの立ち上げに関わり、事業リーダーとして学生支援事業や企業の採用変革業務に従事。数多くの大学で講師等も務める。



キャリアフォーラム

学生にとって、国際開発の第一線で活躍されている方々と直接話し出来る機会は非常に少ない。参加者がゲストの方々との交流を通して国際協力業界をより身近に感じ、各々が将来の進路を考えるためのヒントを得ることを目的に、様々な機関/組織にて国際開発の第一線でご活躍されている5名ゲストを招致し、仕事内容やキャリアステップについてお話ししていただいた。



● 講師紹介

小吹岳志様

オイコクレジットジャパン事務局長 フェアトレード・サマサマ事務局長
 商社勤務のあと様々なボランティア活動、社団法人アジア協会アジア友の会 (AFC) スタッフを経て、1999年より現職。ベトナム・ビルマ・ネパール・バングラデシュなど、南・東南アジアの生産者団体、NGOとの取引を通じ、農村女性や難民、貧困層など社会的弱者の経済的自立支援に取り組み。また他のNGOや学校・大学・行政機関などと協力し、ワークショップやセミナーなどを開催、フェアトレードの普及に努める。さらに現在は、主に途上国のマイクロファイナンス機関等に融資しているオイコクレジット・ジャパンの事務局長も務める。他にフェアトレードタウン・ジャパン理事、ワンワールドフェスティバル実行委員長など。

喜多昭治様

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社政策研究事業本部研究開発第2部
 地域・環境戦略グループ 副主任研究員
 名古屋大学大学院環境学研究所修士、仏国ボンゼシヨセ工科大学大学院MBAプログラム修了、英国イーストアングリア大学大学院開発経済学プログラム課程修了 (ディプロマ)。専門分野は環境行政、行政経営。地方の環境ガバナンス構築をライフワークに、主に自治体で環境・エネルギー問題や環境ビジネス振興を扱う人々の活動支援をしている。また、環境技術の海外展開支援や、途上国での環境改善事業の組成・推進などの取組を進めている。

清原剛様

外務省国際協力局開発協力総括課経協協力専門官/課長補佐
 1995年に明治大学を卒業後、外務省に入省。その後、イギリスおよびインドへの留学を経て、在インド日本国大使館に勤務。外務省経済協力局および国際協力局にてODAなどの政策立案や評価を担当。その後、国際協力機構への出向を経て、2012年より現在の外務省国際協力局開発協力総括課に勤務。無償資金協力に関する制度や民間連携制度の開発、予算執行管理などを担当する。

西村ゆり様

光の音符代表
 光の音符代表の西村ゆり様は音楽家として、1994年に光の音符を立ち上げ、日本のハンセン病療養所などでの出張演奏会等を開催する。2003年には世界最大のハンセン病患者数を有するインドでの活動を始めるために、団体内で「インドプロジェクト実行委員会」が発足した。音楽活動を中心にしてきた光の音符だが、長年の活動の経験を市民一人ひとりの等身大の国際交流として活かすべく、インドの子どものために教育支援を始めた。2011年からJICAとの協力事業である、「草の根技術協力事業「スラムの子どもの自立力向上のための音楽指導者育成計画」を開始。

宮口貴彰様

立命館大学国際関係学部准教授
 ミシガン大学アナーバー校 (理学士・自然資源環境)、シカゴ大学 (公共政策修士)、京都大学地球環境学全博士課程修了 (地球環境学博士)。2004年より国連大学に勤務。世界銀行でのコンサルタントを経てJPOとして2006年よりUNDP-インドネシア事務所で気候変動担当官。その後UNDPの若手幹部養成プログラムのLEADに合格し、UNDP-アジア太平洋事務所、及び国連ボランティア計画で環境・気候変動分野を担当。計8年の国連勤務後、2012年より現職。

講演・講座—キャリアフォーラム

当日の様子

参加者が5つのグループに分かれ、20分ずつ順番に5名のゲストの方々のお話を伺った。ゲストの方々の現在の仕事、そこに至る経緯や仕事の中で感じていることなどお話ししていただいた。参加者も積極的に質問しており、キャリアや仕事内容だけでなく、生身の開発のお話なども聞くことができ、非常に有意義な時間となった。

参加者へのメッセージ

小吹岳志様

最近インドなどに行っても中国人と韓国人ばかりで寂しい思いをしていたが、今日ここにいる皆さんを見て非常に心強く思いました。その中でも私が特に力を入れているのは、コミュニケーション能力。アグレッシブで力強く、そしてしぶとく頑張っていってほしい。

喜多昭治様

会場に着いた当初は学部生が多くて驚いた。みなさんちゃんと勉強しているのとちゃんと問題意識を持っている。今後障害にぶつかるとも思う。でも、基本は同じで、まずはその業界に一歩足を踏み入れてみて、その人たちと話してみる。ぜひ興味あるところには一歩足を踏み出してほしい。

清原剛様

若い人と会うのはいつも楽しみにしている。今回も僕も刺激をもらいました。学生は図々しくてよいと思います。積極的に機会を捕まえてください。ありがとうございました。

西村ゆり様

とても楽しかったです。もしよければ、ぜひ一緒にインドで活動しましょう。

宮口貴彰様

好きなことがあったらとりあえずやってみましょう。人生は社会見学。その中で自分が一番好きなものがでてくると思うので、それを突き詰めてほしい。好きなことを真面目に楽しむことによって、道は開けてくる。楽しんでるときこそが、苦しいときでも活力になると信じてるので、楽しんでるかどうかが、ワクワクしてるかどうかが大事だと思います。

なかなか身近にお話を伺うことができない開発業界の方々とお会いし、これまで経歴や活動、価値観などを直接お伺いすることができ、参加者にとって非常に貴重な時間であった。

特にゲストの方々につきましては、元国連職員、外務省など公的機関だけでなく、民間シンクタンク、国際的なNGO、草の根NGOと幅広い分野からご協力いただき、様々な視点から国際開発を考えるきっかけになりました。ご協力いただきましたゲストのみなさまに、改めて御礼申し上げます。

講演・講座

バングラデシュ国際協力講座

～バングラデシュにおけるソーシャルビジネスの実施報告～

株式会社パデコ理事の井上和雄様をお招きし、今大会の対象国であるバングラデシュ、その歴史や人々の暮らしについてBOPビジネス事業に携わってきた経験を踏まえてお話して頂いた。なかでも、バングラデシュでの水の供給についてのお話が興味深かった。JICAのBOPビジネス事業に採択された雨水タンク販売事業を例に、単にトイレやタンクを作ってフリーライダーを生んでしまうより、現地の人にお金を出させることで持続的なビジネスを展開する意義を教えてくださいました。

また、雨水タンク販売事業の当初の失敗例とその原因についても触れられ、ニーズの汲み取り方や、目の付け所など参考になった参加者は多かったのではなかろうか。バングラデシュの運搬手段、リキシャや大学受験ビジネスなど現場経験がある井上様ならではのお話も聞くことができ、プランニングするうえでバングラデシュのイメージがより明確になったと思われる。

最後に参加者から井上様への質疑の時間をとった。井上様のご経験を踏まえて、日本の政治家とODAについて、社会企業の今後についてなどの質問がなげかけられた。井上様が強調されたのは、「現場体験をやはり積んでほしい。ぜひ、現場に飛び込んでください。」ということだった。

参加者からの質問

Q：バングラデシュの女性はどのような存在？

A：思春期の女の子はあまり外出しない。男の兄弟、下男がついて買い物に行くことはある。女が一人で出かけることははしたないという因習がある。

Q：井上様は政治家もされていましたが、日本の政治家はODAについてどう思っているのですか？

A：まず、途上国経験のある方は増えてきた。選挙区が小さくなったこと、助成金をくれるようになったことでいろいろな経歴の人が立候補できるようになったから。廃坑カードとしての援助という意識が強いかについては、正直に言うとは日本に裨益しなくてはならないのが大義名分であって、ある程度の国益は必要。しかし、民間企業と連携することで途上国自体がすごく底上げされてきて、手が届く人が増えてきているのも事実。従来型というよりは、民間が途上国に行くことで雇用・産業を育成していくことが中心となってくる。

講演者

井上和雄様 株式会社パデコ理事

1977年東京大学教育学部を卒業、1979年に東京大学大学院で、1981年米国オレゴン大学で教育の修士号取得。米国コロンビア大学博士課程中退後、1983年からUNICEFのインド地域事務所に、1991年からはニューヨークの本部に勤務。1995年から衆議院議員川内博史事務所の政策担当秘書、2000年から2005年まで衆議院議員を務める。2006年にエンビックフォーラム株式会社の顧問を務めた後、2007年にUNICEFのインドネシア事務所のパプア州事務所臨時所長に就く。2007年から2010年には東京工業大学大学院の国際的社会起業家養成プログラムのチーフコーディネーターとして勤務。2010年4月より現職、ガーナ、バングラディッシュ、インドにてJICA受託のBOP協力準備調査を統括した。著書に『ユニセフ最前線：戦争を止めた人間愛』リベルタ出版（2004年11月）

開会式

代表の挨拶で始まり、IDPCの団体説明と4日間の流れや各プログラムの説明を行った。

アイスブレイク

4日間を共にするグループ毎にアイスブレイクをした。サイコロを振り、出た目によってお題を決め、チームごとに質問し合った。質問内容には「やめられない話」「私の弱点」など初対面の人でも相手を知れて、かつその場が盛り上がるような内容で、良い雰囲気作りが出来た。その後、他のチームの参加者とも仲良くなるため、全体で自己紹介をした。

目標設定

4日間をより有意義に過ごすため、チームで何を目標とするか、また何を得たいかを考えた。アイスブレイクの時とは異なり、各チーム真剣な面持ちで話し合っていた。

Facebookによる交流

大会前に参加者にはFacebookの本コンテスト用グループページに参加してもらい、自己紹介等を試みた。また大会後にはプロジェクトの改善案や大会中に使用した資料の共有、また国際開発イベントの告知などに活用されている。



結果発表

5つのチームが立案したプロジェクトの発表に対して最終審査員（小吹様、上須様、田中様）の3名にご評価いただき、優勝から3位までを決定した。各審査員が評価項目ごとにつけた点数の合計と、審査員での審議を経て決定した。

フィードバック

審査員から各チームへ、最終発表へのフィードバックを直接お話ししていただいた。フィードバックとしてアドバイスをいただいたり、疑問点を解決したりすることで、自分たちのプランニング過程の良いところや改善ポイント、新しい視点などを改めて見直すことができた。

閉会式

参加者一人ひとりがIDPCでの4日間の感想や将来への想いを発表し、濃密な数日間を共有した仲間同士、お互いの努力を称え合った。代表挨拶を以て第5回国際開発プランニングコンテストは幕を閉じた。

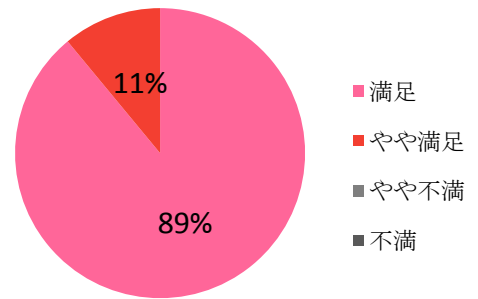


アンケート分析

全体について

参加者の学年は昨年と同様に2回生が多かった。参加者からの意見として、「新しい仲間が出来た」、「開発分野のプロから意見がもらえて有益だった」「開発について良い意味で批判的な視点がもてた」といった意見があり、良い出会いと学びを得ることが出来たようだ。全体的には参加者全員から「満足」という回答をいただけた。

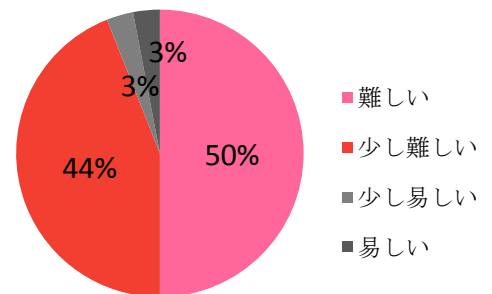
▼コンテスト全体について



プランニングについて

コンテストの難易度について、約9割の参加者が難しかった・どちらかといえば難しかったと答えていた。その理由として、運営側の提示した資料が広範囲であり、漠然としていたため、対象地域や分野、または「豊かさ」といった点を定義していくことが難しかったという声をいただいた。コンテスト中はそれについての議論に多くの時間を費やしているチームが多かった。

▼コンテスト難易度について



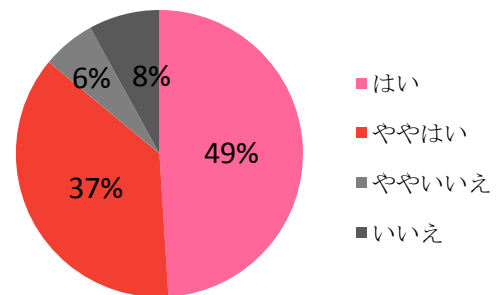
サブコンテンツについて

キャリアフォーラムが有意義であったとの声が多く、参加者からは「とても近い距離で話すことができ将来を真剣に考える機会となった」、「様々な立場で開発分野で働いている方とお話できて視野が広がった」という感想をいただいた。開発ディスカッションやプレゼン講座については、「お話を聞くことだけでなく、自分たちが議論したり、実践する時間があることが良かった」というコメントの他、「バングラデシュの豊かさについてプランニングを始める前に考えさせられた」(基調講演)、「バングラデシュの現状と課題を知ることができてプランニングに役立った」(テーマ講演)という意見があった。改善点として、時間配分が挙げられた。プランニングの時間が短いとの声が多かったため、来年度以降はサブコンテンツの時間配分を検討する必要がある。

コンテストの目的について

参加者の約8割から「国際開発に必要な能力は身に付いたか」という質問に対して良い感触を得られた。特にプランニングをする際のコミュニケーションの大切さ、そしてプレゼン能力に関しての意見を多くいただいた。他にも国際開発に関する知識を得られたこと、自分の価値観を相対化する視点を養えたとの意見もあった。多くの参加者が自分の足りない能力面を認識できたのではないかと思う。国際開発に関する知識や必要な能力の強化など、IDPCが掲げている目的を達成できた。

▼国際開発に必要な能力は身に付いたか



運営報告

—組織概要

団体概要

正式名称：International Development for Progress and Change

創設：2008年4月28日

スタッフ数：12名

ホームページ：<http://idpc.weblike.jp/top/>

問い合わせ先：idpcjp@gmail.com

Vision

「国際開発を志す若者の為のプラットフォームとなる」

国内には世界に視野を向けた若者がたくさんおり、その多くが「途上国のために役に立ちたい」と強く願っている。しかし、今の日本には彼らの芽を摘んでしまうのに十分な理由が多く存在する。例えば、「国際開発の現場で必要とされる能力を身につける機会が少ない」ということであったり、「国際開発の分野での業務が現実的な将来の選択肢として捉えられにくい」といったことが挙げられる。このような環境の中で、国際開発を志す若者たちを支援し彼らの可能性を広げるべく、IDPCは当初国際開発プランニングコンテスト実行委員会として2008年に東京でスタートした。IDPCは形を変えつつも初代の考え方を受け継ぎながら、国際開発プランニングコンテストやワークショップなど様々なイベントを通して、国際開発を志す若者や現職者たちが集まり、既存の問題が多く残る国際社会を変える力を得ることができるプラットフォームになることを目指している。

Mission

上記のVisionを実現すべく、以下の3つの場を提供することを目指す。

- 1、国際開発で必要な能力を身につけられる『場』
- 2、同じ熱い志を持った仲間と出会える『場』
- 3、国際開発の第一線で活躍する現職者と交流できる『場』

本年度の活動

上記に掲げた理念を果たすべく、IDPCは国際開発プランニングコンテスト他下記イベントを開催した。

2013年6月 第1回国際開発ワークショップ(関西)

2013年9月 現職者インタビューページ開設

2013年11月 第2回国際開発ワークショップ(関西)

2014年2月 第5回国際開発プランニングコンテスト開催 (関東・関西)

スタッフ紹介

関東—

代表 兼 企画：河合彩里伊

総務局：佐藤大恭

渉外局：青木美佳

広報局：川口一毅

関西—

代表 兼 企画：森本和明

総務局：清水和希、香河憲成、久保裕美

渉外局：中村俊一朗、上野仁太

広報局：吉川智美、村上彩

IDPC運営の際には総務・渉外・企画・広報の4局に分かれ、業務を分担している。スタッフは学部2年から修士2年まで在籍しており、各々の専攻分野は法学、外国語、理化学分野など国際開発分野のみならず多岐にわたる。

ミーティングは毎週木曜日に行い、大会運営等について話し合う。またSkypeを利用し、東西それぞれ議論した内容などを共有してIDPC全体の運営を取りまとめている。

定期ミーティング

以下の通りミーティングを行い、コンテスト等イベントの開催に向けて活動した。

関東ー

日時：毎週木曜日 1900～2130

場所：賢者屋、慶応大学

関西ー

日時：毎週木曜日 1800～2130

場所：キャンパスプラザ京都、大阪大学中之島センター

東西ー

Skypeのオンラインサービスを利用し、東西共にコンテスト等の運営を進めるためミーティングを行った。

ブログ

IDPCにはどのような学生が集まり、どのような活動を行っているのかを広報するため、定期的にブログを更新した。団体創立当初から続くブログは代々多くの方が見てくださっているため、今年度も活発に活動していることを周知するための良い場となった。スタッフ各々の自己紹介や国際開発に関する意見も記すことで、団体の透明性をより高め、愛着を持っていただけるよう心掛けた。

インタビュー

国際開発の第一線で活躍する現職者にインタビューを行い、ホームページにインタビュー内容を掲載した。Facebookページも利用し、多くの方々の目に触れるよう工夫した。

ケース課題作成

昨年度に引き続き、関東・関西共同でコンテストを開催した。また、コンテストでのケース課題は、東西共に同一のものを用いた。これによって、同じ課題に対して他チームの参加者が策定したプラン内容を共有し、参加者は日本全国に同じ志を持つ学生がいることを感じられた。

広報活動

団体の周知や参加者募集などは、SNSやホームページなどオンラインでの広報を主に行い、口コミやビラ配布、ゼミでの告知などオフラインでの広報にも力を入れた。SNSは情報の拡散が容易である一方、限られたコミュニティ内での広報となるため、未だアプローチできていない人々への広報活動の必要性も感じられた。

決算報告

収入			
収入元	(円)	数	(円)
前年度繰越金			34,527
スタッフ活動費			55,500
参加費	16,000	50名	800,000
収入計			890,027

支出			
用途	諸経費(円)	数	小計(円)
参加者食費（東京）	1,155	32名×3日間	110,880
参加者食費・宿泊費（大阪）	312,823		312,823
施設使用料（東京）	310,300		310,300
施設使用料（大阪）	69,840		69,840
wifi接続費	13,650		13,650
資料作成費	14,000		14,000
当日備品（東京）	14,700		14,700
当日備品（大阪）	27,933		27,933
支出計			874,126

株式会社オーシャナイズ様



賢者の選択PFY様



キャンパスプラザ京都様



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

